| 科目名 | 家族関係論 | 対象学年・時期 | 2年　前期 |
|---|---|---|---|
| 講師 | 非常勤講師 | 単位数・時間数 | 2単位・30時間 |
| 講義概要 | ディプロマポリシー1・3・6に基づく。<br>看護の対象である人間は、家族もしくはそれに相当する機能を持つ集団の中で成長・発達し、さまざまな社会集団に属しながら「一個人」としてのアイデンティティを確立する。人間が誕生し最初に属する集団は「家族」であり、「家族」は社会を構成する最小の集団といわれる。<br>地域包括ケアシステムの推進にあたっては、看護の対象の捉え方を「病院で療養する人」から「地域で暮らす人」へと大きく転換していかなくてはならない。この「地域で暮らす人」を捉えるうえで欠かすことのできないのが「家族」の存在である。現代社会は「家族」の概念も変化してきているため、「家族」を理解するためには「家族」を血縁だけとせず、家族システムを担う集団、発達する存在としての集団と捉えることが重要であり、価値観としての家族、暮らしの場としての家族を多角的に理解する能力が求められる。また、現代の多様な家族形態や規範は公的・私的なさまざまな問題を生じさせる要因となることを理解する必要がある。<br>そこで、ここでは現代の家族の特徴を知り家族を多角的に理解する能力と、家族に生ずる問題の本質を見極め家族レジリエンスを高めるための支援の基礎的知識を得ることをねらいとして科目を設定する。そして、ここでの学習が家族の構成員となる個々人の多様な価値観を尊重し、多様性への寛容さを育む基盤となることを期待する。 | | |
| 授業形態 | 講義及び演習（グループ学習） | | |
| 学習目標 | 家族社会学、家族心理学、家族関係学の知見を学び、家族および家族関係についての理解を深めるとともに、家族看護の実践に向けて家族に関する知識を自ら身につけていくことができる力の獲得を目指す。<br>➔「家族」を理解するために3つの理論を学ぶ。<br>①家族システム理論　②家族発達理論　③家族ストレス対処理論 | | |
| 授業計画 | 第1回 | 家族とは | |
| | 第2回 | 近代家族について | |
| | 第3回 | 家族を理解する３つの理論 | |
| | 第4回 | パートナーの選択、パートナーシップの多様化 | |
| | 第5回 | 子育て、ワーク・ライフ・バランス | |
| | 第6回 | 家族の多様化、家族内暴力 | |
| | 第7回 | 高齢期と家族、家族間介護 | |
| | 第8回 | 家族療法 | |
| | 第9回 | 家族アセスメント | |
| | 第10回<br>第11回 | グループ演習A『簡潔期にある虚弱高齢者と家族の看護』 | |
| | 第12回<br>第13回 | グループ演習B『医療的ケア児を在宅に迎える家族への看護』 | |
| | 第14回 | 家族のゆくえ、全体的なまとめ | |
| 使用テキスト | 『看護学テキストNICE　家族看護学(改訂第3版)」必要に応じてプリントを配布するので、ファイルしておくこと。<br>長津美代子･小澤千穂子(2014)『新しい家族関係学』健帛社<br>岩間暁子･大和礼子･田間泰子(2015)『問いからはじめる家族社会学」有斐閣ストゥディア<br>鈴木和子･渡辺裕子(2012)『家族看護学』(第4版)日本看護協会出版会<br>中釜洋子･野末武義･布柴靖枝･武藤清子編(2019)『家族心理学〔第２版〕」有斐閣 | | |

| | |
|---|---|
| 事前学修・<br>事後学修<br>（学習を促進できる学修） | |
| 評価基準と<br>評価方法 | 試験及び授業態度による |
| 備考 | 特になし |